

社会的養護の新展開 19

—稲盛和夫氏と社会的養護—

浦田 雅夫

京都女子大学

2022年8月末、京セラ名誉会長である稲盛和夫氏、ご逝去の報に接した。

「一代で京セラを世界企業にした」「NTTの独占下の通信業界でKDDIを創業した」「盛和塾を開き、経営哲学、フィロソフィーを説いた」そして、「日本航空を再建した」などが新聞、ニュースで大きく報道された。一方で、社会福祉事業家としての側面はあまり多く報じられていないが、とりわけ社会的養護の分野における貢献は大きい。

私は、稲盛和夫理事長(当時)のもと、京都府精華町に建設された児童養護施設・乳児院京都大和(だいわ)の家の草創期に初代施設長西川満氏とともに関わらせていただいた。稲盛氏がどのような経緯で社会的養護に関わられるようになったのかは神田(2012)が詳しく述べている。

さて、講演も含め、何度か直接、稲盛氏のお話を聞く機会があったが特に印象に残っている話がある。

ある北国の湖の畔で、毎年、飛来する渡り鳥の群れに餌を与える老人の話である。ある年、老人は餌付けに来なかった。その年はひどい寒波で湖は凍結した年であった。もはや自力で餌をとることのできない渡り鳥たちは餓死せざるを得なかったというのである。

私なりに児童養護の場におきかえ考えるならば、その子どもの状態や特性、ニーズを把握し、しっかりとアセスメントした上で、いま何をしなければならぬかということの中長期的な視点ももって行うということだ。支援者の一時的な感情による行為は、かえって子どもを無力化させてしまうこともある。

「周囲に感謝の心をもつこと」「感謝は幸運を呼び込む」ということもいつも説かれた。

これも私なりに考えるならば、本来、基本的信頼感を形成する親子関係において深い傷つきや不信を持ち、家庭や地域、社会に対する反感も強い社会的養護を必要とする子どもたちが、「周囲に

感謝の心をもつこと」ほど難しいことはないと思う。感謝どころではなく、不平不満にあふれている者も少なくないからだ。しかし、だからこそ、彼らが自然に感謝の気持ちを持てるような関わりが職員には求められるということだろう。

稲盛氏は児童養護施設・乳児院運営のため 2003 年に社会福祉法人 盛和福社会を設立されたが、同年、公益財団法人 稲盛福祉財団も設立され、児童養護施設の運営開始と連動するように、児童養護施設や里親による代替的養育、措置を終えた若者の自立を支える「生活自立支援金」制度を創設している。この制度は若者が措置解除後、一定期間月々の支援金を受けるだけでなく、財団の職員が定期的に本人、施設から直接、間接に現況報告を受ける仕組みで、若者の退所後の困難や生活ニーズを把握する機会にもなっている。

養育の場を運営するとともに、出た後の困難まで思い至る背景に、稲盛氏自身の若いときの苦労や周囲からのサポートがあったものと思われる。

2019 年末に解散された「盛和塾」からは、総額 6 億円近い寄付を中央共同募金会に行い、赤い羽根福祉基金「盛和塾 社会人定着応援プログラム」が展開されているところである。

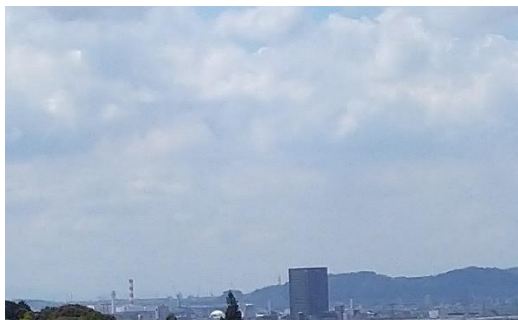
感謝の気持ちを持てなかった子どもたちが、ありがとうと自分で感じる事ができる社会をめざしたいものです。

合掌

参考

神田嘉延「稲盛和夫と児童福祉：京都の大和の家を中心として」鹿児島大学稲盛アカデミー研究紀要 4 巻 2012 年

<https://www.akaihane.or.jp/seiwajyuku-2/>



研究室からみえる京セラ本社